需給動向

海外の畜産物の需給動向

牛　肉

米　国

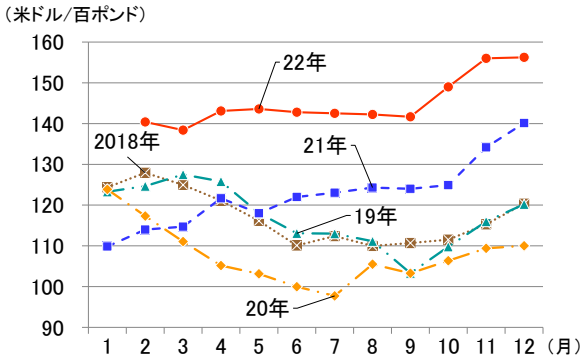
11月の牛肉輸出量は減速も、22年累計では前年増を維持

肥育牛価格、例年を上回って推移

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2023年１月１日時点のフィードロット飼養頭数は1168万2000頭（前年同月比2.9%減）とやや減少し、４カ月連続で前年同月を下回った。同省経済調査局（USDA/ERS）によると、肥育牛の供給不足が続く中、22年12月の肥育牛価格は100ポンド当たり156.25米ドル（1キログラム当たり452.88円：1米ドル＝131.47円(注)、前年同月比11.5%高）と高騰が続いている（図１）。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

図１　肥育牛価格の推移

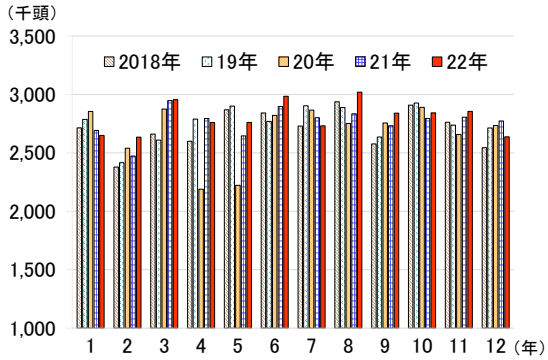


資料：USDA「Livestock & Meat Domestic Data」
注１：ネブラスカの相対取引価格、チョイス級、去勢。
注２：2022年１月の値は、N/A値。

22年と畜頭数、干ばつの影響などにより前年を上回る

USDA/NASSによると、2022年12月の牛と畜頭数は263万6700頭（前年同月比4.9%減）とやや減少した（図２）。これは、年末に北米が記録的な寒波に見舞われた中で、食肉加工場の稼働日が減少したことが要因とされる。また、22年全体のと畜頭数は、長引く干ばつによる飼料費の高騰などにより3366万4500頭（前年比1.4%増）と前年を上回った。内訳を見ると、去勢牛が1581万400頭（同2.1%減）と減少し、未経産牛が1029万1800頭（同4.8%増）、経産牛が699万7900頭（同4.9%増）とそれぞれ増加した。こうした中、と畜頭数の増加などにより22年の牛肉生産量は1283万2300トン（同1.2%増）と前年を上回ったが、繁殖雌牛の淘汰（とうた）が進んだことから、23、24年の牛肉生産量の減少が予想される。

図２　牛と畜頭数の推移



資料：USDA「Livestock Slaughter」
注：連邦検査ベース。

22年11月の牛肉輸出量、為替の影響などにより前年同月を下回る

USDA/ERSによると、2022年11月の牛肉輸出量は12万5666トン（前年同月比6.1%減）とかなりの程度減少し、カナダやフィリピンを除いた主要輸出先がいずれも前年同月を下回った（表）。中でも日本向けは２万7938トン（同10.1%減）と米ドル高による米国産牛肉の価格上昇もあり、かなりの程度減少した。一方、22年１～11月の累計では148万3316トン（前年同期比4.0%増）と前年増を維持している。米国食肉輸出連合会（USMEF）のホルストロム会長は、「主要輸出先の為替相場の影響で輸入業者などは米国産牛肉の購入を抑えているが、11月上旬以降は米ドルが下落傾向にあるため、現時点の米国産牛肉の需要は比較的堅調である」として、23年の牛肉輸出に対し前向きな見通しを示した。

表　輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年11月	22年11月	前年同月比（増減率）	シェア	22年（1～11月）	前年同期比（増減率）
日本	31,080	27,938	▲10.1%	22.2%	337,944	▲1.7%
韓国	29,989	29,078	▲3.0%	23.1%	334,976	2.1%
中国	22,223	19,837	▲10.7%	15.8%	271,914	22.3%
メキシコ	12,851	12,153	▲5.4%	9.7%	115,325	▲11.6%
カナダ	10,039	10,829	7.9%	8.6%	114,240	1.6%
台湾	7,840	6,101	▲22.2%	4.9%	84,718	6.1%
香港	3,777	3,529	▲6.6%	2.8%	33,824	▲36.8%
フィリピン	778	1,844	137.0%	1.5%	25,609	67.9%
その他	15,321	14,358	▲6.3%	11.4%	164,767	17.3%
合計	133,899	125,666	▲6.1%	100.0%	1,483,316	4.0%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」
注：枝肉重量ベース。

（調査情報部　伊藤　瑞基）

E　U

牛肉の外食需要の回復および供給量の低迷から価格は堅調

牛肉生産量、前年同月比3.8%減

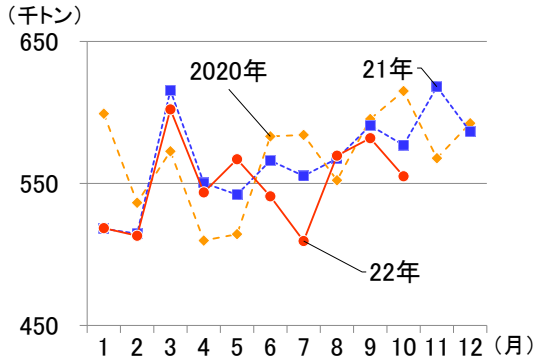
欧州委員会によると、2022年10月の牛肉生産量（EU27カ国）は55万5080トン（前年同月比3.8%減）と前年同月をやや下回った（図）。同月のと畜頭数は189万9830頭（同3.7%減）と減少し、１頭当たり枝肉重量は292.2キログラム（同0.1%減）と前年並みとなった。加盟国別の牛肉生産量を見ると、アイルランド（同3.6%増）を除きすべての主要生産国で前年同月を下回った（表１）。同委員会によると、牛群に占める肉専用種の割合は増加傾向で推移しているものの、有機畜産や粗放的な生産体系への移行、また1人

当たり牛肉消費量の減少などにより、EUの牛肉生産量は減少傾向で推移すると見込んでいる。

22年12月の牛枝肉平均卸売価格(注1)は、100キログラム当たり509.64ユーロ(7万2909円、1ユーロ:143.06円(注2)、同18.5%高)と21年3月以降、引き続き前年同月を上回って推移している。価格の上昇について同委員会は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)により減退していた外食需要などが回復しつつあることに加え、供給量が世界的に低迷していることを要因としている。

(注1)若雄牛(A)、去勢牛(C)および若齢牛(Z)のうち枝肉の格付けが上(R)、枝肉の脂肪の付着度合が平均的(5段階中3)なものの平均価格(A/C/Z-R3)。
(注2)三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

図　牛肉生産量の推移



資料:欧州委員会「Eurostat」
注1:直近月は速報値。
注2:枝肉重量ベース。

表1　主要生産国別牛肉生産量の推移

(単位:千トン)

	2021年10月	22年10月	前年同月比(増減率)	22年(1～10月)	前年同期比(増減率)
フランス	116	112	▲3.3%	1,132	▲4.1%
ドイツ	91	84	▲8.5%	798	▲8.7%
イタリア	63	62	▲1.2%	620	2.0%
スペイン	60	59	▲1.5%	618	4.5%
アイルランド	53	55	3.6%	520	5.5%
ポーランド	46	42	▲8.5%	452	▲2.9%
オランダ	36	36	▲2.4%	348	▲1.4%
その他	111	105	▲5.1%	1,014	▲1.8%
合計	577	555	▲3.8%	5,501	▲1.7%

資料:欧州委員会「Eurostat」
注:枝肉重量ベース。

英国への牛肉輸出量は大幅に増加

2022年1～10月の冷蔵および冷凍牛肉輸出量は、前年同期比3.8%減の36万5796トンとやや減少した(表2)。これは、冷蔵牛肉の輸出量が同2.7%増とわずかに増加したものの、冷凍牛肉の輸出量が同11.7%減とかなりの程度減少したことが影響した。一方で、特徴的な動きとして、英国向け輸出量が増加していることが注目される。これは、冷蔵品ではポーランド(同18.6%増)およびオランダ(同11.9%増)、冷凍品ではドイツ(同404.9%増)およびポーランド(同1.6%増)から、比較的安価なものの輸出量が増加したことが要因として挙げられる。一方で、冷蔵・冷凍ともに英国向け輸出量第1

位のアイルランドは、同期の輸出量を減少させた。英国が輸入した冷凍牛肉はドイツ、ポーランドからのほか、ブラジルやニュージーランドからも増加しており、英国農業・園芸開発委員会（AHDB）によると、この傾向は世界の冷凍食肉市場が今後成長していくという業界の動向を反映するものとしている。

一方、同期の冷蔵および冷凍牛肉輸入量（EU27ヵ国）は、主に英国を中心に同31.8%増と大幅に増加した（表３）。欧州委員会は、牛肉需要が安定する中で、EU域内での牛肉供給量の減少を輸入で補ったことが増加の要因としている。

表２　輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

品目	輸出先	2021年（1～10月）	22年（1～10月）	前年同期比（増減率）
冷蔵	英国	122,585	141,416	15.4%
	ボスニア・ヘルツェゴビナ	27,550	25,286	▲ 8.2%
	スイス	16,346	15,223	▲ 6.9%
	ノルウェー	14,811	8,589	▲ 42.0%
	マケドニア旧ユーゴスラビア共和国	6,820	5,898	▲ 13.5%
	モンテネグロ	2,228	2,397	7.6%
	アンドラ	887	1,050	18.4%
	その他	17,994	14,942	▲ 17.0%
	合計	209,221	214,801	2.7%
冷凍	英国	50,079	63,560	26.9%
	フィリピン	20,542	17,551	▲ 14.6%
	日本	10,817	9,571	▲ 11.5%
	カナダ	8,957	8,326	▲ 7.0%
	ガーナ	7,356	4,603	▲ 37.4%
	米国	5,897	4,005	▲ 32.1%
	ベトナム	3,827	3,070	▲ 19.8%
	その他	63,507	40,309	▲ 36.5%
	合計	170,982	150,995	▲ 11.7%
冷蔵・冷凍計		380,203	365,796	▲ 3.8%

資料：「Global Trade Atlas」
注：冷蔵のHSコードは0201、冷凍のHSコードは0202。

表３　輸入先別牛肉輸入量の推移

（単位：トン）

品目	輸入先	2021年（1～10月）	22年（1～10月）	前年同期比（増減率）
冷蔵	英国	36,179	70,752	95.6%
	アルゼンチン	30,760	39,484	28.4%
	ウルグアイ	18,773	19,787	5.4%
	米国	8,968	12,504	39.4%
	ブラジル	12,104	11,906	▲ 1.6%
	オーストラリア	6,181	6,003	▲ 2.9%
	日本	779	1,885	142.0%
	その他	4,062	5,526	36.0%
	合計	117,806	167,847	42.5%
冷凍	ブラジル	30,109	34,186	13.5%
	英国	12,042	12,793	6.2%
	ウルグアイ	10,474	7,568	▲ 27.7%
	アルゼンチン	2,422	2,921	20.6%
	ニュージーランド	1,754	2,625	49.7%
	パラグアイ	1,410	2,055	45.7%
	ナミビア	787	1,832	132.8%
	その他	1,097	2,711	147.1%
	合計	60,095	66,691	11.0%
冷蔵・冷凍計		177,901	234,538	31.8%

資料：「Global Trade Atlas」
注：冷蔵のHSコードは0201、冷凍のHSコードは0202。

（調査情報部　渡辺　淳一）

豪　州

牛群再構築の完了で、23年の牛肉生産量・輸出量は増加の見通し

今後の牛飼養頭数は増加基調で推移

豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）は2023年1月、最新の牛肉生産量などの見通しとなる「Industry projections 2023」を公表した（表１）。

表１　牛肉生産量などの見通し

項目	2021年	22年（今回見込値）	前年比（増減率）	23年（今回予測値）	24年（今回予測値）	25年（今回予測値）
牛飼養頭数（千頭）	26,111	27,583	5.6 %	28,817	29,344	29,588
成牛と畜頭数（千頭）	6,018	6,150	2.2 %	6,625	7,224	8,000
牛肉生産量（千トン）	1,883	1,968	4.5 %	2,087	2,225	2,416
１頭当たり枝肉重量（キログラム）	313.0	320.0	2.2 %	315.0	308.0	302.0
牛肉輸出量（千トン）	888	854	▲ 3.8 %	1,014	1,087	1,211
生体牛輸出頭数（千頭）	772	600	▲ 22.3 %	619	681	750

資料：MLA「Industry projections 2023」
注１：牛肉生産量は枝肉重量ベース。牛肉輸出量は船積重量ベース。
注２：子牛および子牛肉を除く。
注３：2022年は見込値。23年以降は予測値。

これによると、23年は牛群再構築が完了し、牛飼養頭数が2881万7000頭と、14年以来の水準にまで回復するほか、25年には2958万8000頭に達するなど、今後の天候にかかわらず、増加すると見通している。牛飼養頭数の増加に伴い、成牛と畜頭数も23年に662万5000頭、25年に800万頭まで増加するとしている。ただしMLAでは、食肉処理施設での労働力確保が依然として困難な状況にある中で、と畜処理の停滞による牛肉生産量および輸出量への影響が懸念されるとしている。

また、牛肉生産量の増加に伴い、牛肉輸出量も着実に増加するとして、23年に101万4000トン、25年に121万1000トンまで増加すると見通している。米国の干ばつによる牛群整理で同国産牛肉が席巻してきた日本や韓国、米国内の市場では、今後、米国産牛肉の供給減少および豪州産牛肉の生産増加見込みにより、豪州産牛肉が有利な立場に立つとしている。

牛肉輸出量、米国向けが日本向けを抜いて１位に

豪州農林水産省（DAFF）によると、2022年12月の牛肉輸出量は7万6118トン（前年同月比1.2%減）とわずかに減少し、22年1～12月の通年では85万4592トン（前年比3.7%減）と03年以来最も低い輸出量となった（表２）。

輸出先別に見ると、20年8月以来1位であった日本向けを抜いて、12月は米国向けが１位となり、１万6634トン（前年同月比8.6%増）とかなりの程度増加した。ただし、22年1～12月の通年では、これまで同国の牛肉供給が潤沢であったため、13万3925トン（前年比7.7%減）とかなりの程度減少した。日本向けは１万6429トン（前年同月比2.3%減）とわずかに減少したが、22年通年では21万4305トン（前年比8.3%減）と引き続き最大の輸出先となっている。中国向けは1万2950トン（前年同月比6.2%減）とかなりの程度減少したが、22年通年では15

表２　輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年12月	22年12月	前年同月比（増減率）	22年（1～12月）	前年比（増減率）
米国	15,322	16,634	8.6%	133,925	▲ 7.7%
日本	16,819	16,429	▲ 2.3%	214,305	▲ 8.3%
韓国	15,181	16,125	6.2%	160,725	▲ 2.6%
中国	13,805	12,950	▲ 6.2%	158,086	6.6%
東南アジア	6,883	6,075	▲ 11.7%	89,839	▲ 5.8%
中東	2,596	2,081	▲ 19.8%	28,060	▲ 6.8%
EU	315	216	▲ 31.3%	7,069	▲ 9.0%
その他	6,137	5,608	▲ 8.6%	62,584	0.9%
輸出量合計	77,058	76,118	▲ 1.2%	854,592	▲ 3.7%

資料：DAFF
注１：船積重量ベース。
注２：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。
注３：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラアス・アル=ハイマ）の合計。

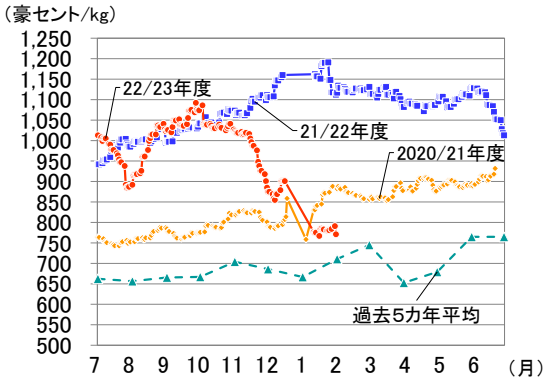
万8086トン（前年比6.6%増）と、主要輸出先の中で唯一増加した。

肉牛価格は年明けに急落

肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、年明けに１キログラム当たり124豪セント（116円：１豪ドル=93.93円(注)）安でスタートし、2023年1月31日時点では同771豪セント（724円）となった（図１）。肉牛の取引などを行う豪州最大の農業関連デジタル取引プラットフォームを運営するオークションプラスは、牛群再構築が完了し、牛の需要が堅調に推移するとともに、平年並みの天候に戻るとみられることから（図２）、本年末のEYCI価格は同750豪セント（704円）前後で取引されると見通している。

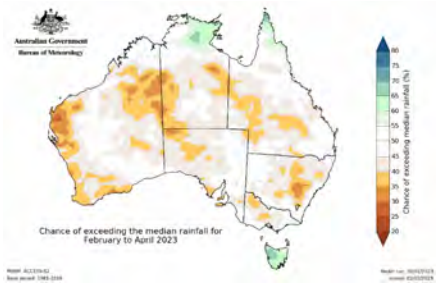
（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

図１　EYCI価格の推移



資料：MLA
注１：年度は7月～翌6月。
注２：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部３州（クイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。

図２ 2023年2～4月の豪州における降雨予想図



資料：豪州気象局（BOM）ウェブサイトから引用

（調査情報部　国際調査グループ）

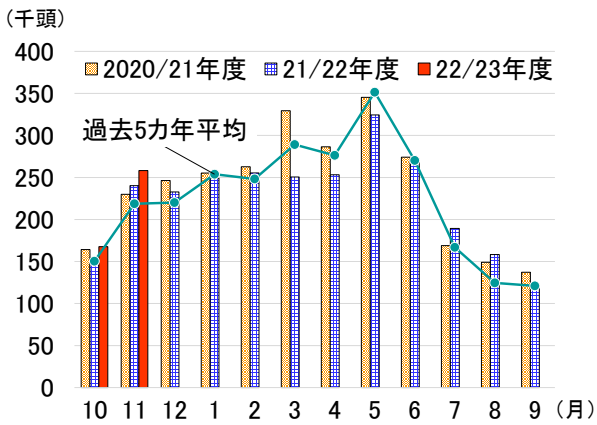
N　Z

と畜頭数の増加を受け22/23年度の牛肉生産量、輸出量ともに前年度を上回る見通し

22年11月の牛と畜頭数、過去最高を記録

ニュージーランド統計局（Stats NZ）によると、2022年11月の牛と畜頭数は25万8000頭（前年同月比7.5%増）とかなりの程度増加し、同月実績では1981年の統計以降、過去最高を記録した（図）。また、と畜頭数の内訳を見ると、去勢牛（８万頭、同9.6%増）、雄牛（7万1000頭、同1.4%増）、経産牛（4万2000頭、同20.0%増）、未経

図　牛と畜頭数の推移



資料：Stats NZ
注：年度は10月～翌９月。

産牛（６万5000頭、同4.8%増）のすべてで増加した。

これは、近年のアジア各国での旺盛な牛肉需要に加え、主要牛肉輸出国である豪州での牛群再構築に伴う牛肉供給量の減少などが背景にある。このため、NZ産牛肉への需要が高まっており、国内の肉用牛飼養頭数も増加基調にある。Stats NZによると、22年６月末時点の肉用牛飼養頭数は、384万1800頭（推計値、同3.1%減）と前年同月をやや下回ったものの、直近5年間の平均飼養頭数（381万5000頭）を0.7%上回り、増加傾向が続いている。

22年12月の牛肉輸出量、中国を除く主要５カ国向けが増加

Stats NZによると、2022年12月の牛肉輸出量は4万8499トン（前年同月比8.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った（表1）。内訳は、冷蔵牛肉が3128トン（同22.0%減）、冷凍牛肉が4万5371トン（同11.0%増）となった。輸出先別に見ると、中国は引き続き最大の輸出先となったが、同国でのCOVID-19の拡大やそれに伴う規制などにより、主要需要者である外食産業が大きく影響を受けたことで、冷蔵品、冷凍品ともに減少した。一方、輸出先第2位の米国では、食料価格の高騰を受けてより安価なひき肉需要が増加傾

表１　輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

		2021年12月	22年12月	前年同月比（増減率）	22/23年度（10～12月）	前年同期比（増減率）
中国		23,343	20,378	▲ 12.7%	50,270	1.6%
	冷蔵	1,384	695	▲ 49.7%	1,958	▲ 40.5%
	冷凍	21,959	19,682	▲ 10.4%	48,312	4.6%
米国		11,012	15,284	38.8%	28,074	8.0%
	冷蔵	880	438	▲ 50.2%	974	▲ 51.5%
	冷凍	10,133	14,846	46.5%	27,100	13.0%
日本		2,627	2,975	13.2%	7,163	3.2%
	冷蔵	538	719	33.8%	1,892	21.8%
	冷凍	2,089	2,255	7.9%	5,271	▲ 2.2%
韓国		1,910	2,689	40.8%	5,670	16.8%
	冷蔵	3	0	▲ 100.0%	7	▲ 43.3%
	冷凍	1,907	2,689	41.0%	5,663	16.9%
台湾		1,249	1,705	36.5%	3,442	4.1%
	冷蔵	50	71	42.0%	128	30.6%
	冷凍	1,199	1,634	36.3%	3,314	3.3%
カナダ		1,075	1,186	10.3%	2,621	25.2%
	冷蔵	74	85	14.3%	163	▲ 5.6%
	冷凍	1,001	1,101	10.0%	2,458	28.0%
その他		3,685	4,284	16.3%	13,720	6.8%
	冷蔵	1,082	1,119	3.4%	3,009	▲ 4.8%
	冷凍	2,602	3,165	21.6%	10,711	10.6%
合計		44,900	48,499	8.0%	110,960	5.2%
	冷蔵	4,011	3,128	▲ 22.0%	8,131	▲ 21.1%
	冷凍	40,889	45,371	11.0%	102,829	8.0%

資料：Stats NZ
注１：船積重量ベース。
注２：年度は10月～翌９月。

向にあり、これに対応可能なNZ産牛肉への引き合いが強まったとみられる。また、コロナ禍からの経済回復を受けて日本をはじめ、韓国および台湾などのアジア圏からの引き合いが強まった。

22/23年度の牛肉輸出量、堅調に推移する見込み

ビーフ・アンド・ラム・ニュージーランド（BLNZ）が公表した「New Season Outlook 2022-23」の見通しによると、2022/23年度（10月～翌9月）の輸出向け牛と畜頭数は、269万1000頭（前年度比1.2%増）とわずかな増加が見込まれている（表2）。また、牛肉生産量も68万6000トン（同0.7%増）とわずかな増加が見込まれ、牛肉輸出量も46万8000トン（同0.6%増）と堅調に推移すると見込まれている。一方、輸出額については、（1）輸出競合国である豪州産（牛群再構築の完了）やブラジル産（好天による容易な飼料確保）の供給量増加に伴う輸出競争の激化（2）米ドル高で推移する為替相場の緩和―などから、前年並みで推移すると見込まれている。

表２　輸出向け牛と畜頭数などの見通し

	単位	2019/20年度	20/21年度	21/22年度	22/23年度	前年度比
と畜頭数	千頭	2,674	2,806	2,660	2,691	1.2%
うち去勢牛	千頭	588	669	649	646	▲ 0.5%
未経産牛	千頭	491	550	516	514	▲ 0.4%
雄牛	千頭	546	553	530	525	▲ 0.9%
経産牛	千頭	1,048	1,034	965	1,006	4.2%
生産量	千トン	679	717	681	686	0.7%
うち去勢牛	千トン	184	208	203	202	▲ 0.5%
未経産牛	千トン	120	134	125	125	0.0%
雄牛	千トン	163	166	160	158	▲ 1.3%
経産牛	千トン	212	209	193	202	4.7%
１頭当たり枝肉重量	キログラム	254	256	256	255	▲ 0.4%
輸出量	千トン	505	544	465	468	0.6%
輸出金額	百万ＮＺドル	4,015	4,112	4,737	4,725	▲ 0.3%
輸出単価	ＮＺドル／トン	7,950	7,557	10,190	10,092	▲ 1.0%

資料：BLNZ
注１：2021/22年度は予測値。
注２：生産量は枝肉重量ベース。輸出量は船積重量ベース。

（調査情報部　工藤　理帆）

豚　肉

カナダ

と畜頭数の減少などから、22年の豚肉生産量はわずかに減少の見込み

22年の豚肉生産量、前年比2.6%減

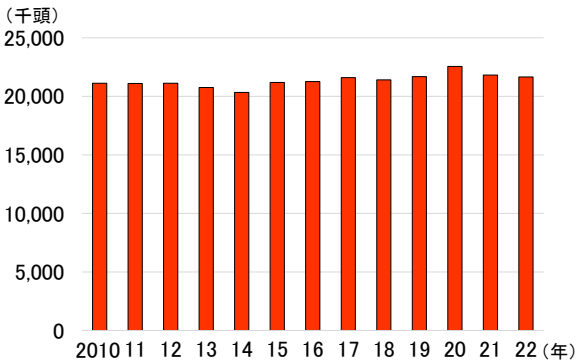
カナダ農務・農産食品省（AAFC）によると、2022年の豚と畜頭数は2165万頭（前年比0.8%減）と2年連続で前年を下回った（図１）。カナダでは、コロナ禍以降の労働者不足などから食肉処理加工施設の稼働率が低下しており、これが減少の要因とされている。現地報道によると、労働者の短期離職率が高く、十分な人手確保が困難な状況が続いていることから、一部の施設では処理加工工程の大部分を自動化するなど、機械化の動きが進んでいる。米国農務省海外農業局（USDA/FAS）によると、22年のカナダの豚肉生産量は、と畜頭数の減少などにより206万5000トン（前年比2.6%減）とわずかに減少すると見込まれている。

22年の生体豚輸出頭数、前年同月比4.7%減

カナダ統計局（Statistics　Canada）によると、2022年11月の米国向け生体豚輸出頭数は、54万8330頭（前年同月比0.6%減）と6カ月連続で減少した（図２）。この結果、22年累計では635万頭（前年比4.7%減）と前年を下回ると見込まれている。また現在、最大の輸出先である米国では、母豚の飼育環境の規制強化に関するカリフォルニア州法第12号の施行が停止されており(注)、今後、同法が可決・適用された場合には、米国向け生体豚輸出の大幅な減少が懸念されている。

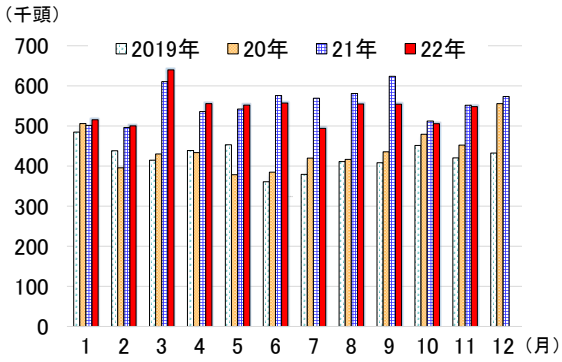
（注）海外情報「母豚飼養基準などに関するカリフォルニア州法を巡る裁判、口頭弁論を開催（米国）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003383.html）を参照されたい。

図１　豚と畜頭数の推移



資料：AAFC「Hog Slaughterings at Federally and/or Provincially Inspected Packing Plants」

図２　米国向け生体豚輸出頭数の推移



資料：Statistics Canada
注：HSコードは0103。

22年11月の豚肉輸出量、前年同月比13.1%減

カナダ統計局によると、2022年11月の豚肉輸出量は、7万9800トン（前年同月比13.1%減）とかなり大きく減少した。また、22年1～11月の累計では、100万1100トン（前年同期比3.8%減）とやや減少した（表）。輸出先別に見ると、米国向けは、同国の需要が旺盛な中で生産量が減少していることなどから、30万9400トン（同20.4%増）と大幅に増加している。中国向けは、11月単月では大幅に増加したものの、カナダの一部施設を対象とした輸入停止措置による影響などから、累計では14万6400トン（同39.7%減）と大幅に減少している。また、日本向けもカナダドル高で推移した為替相場の影響から、累計では17万2200トン（同8.8%減）とかなりの程度減少している。

表　輸出先別豚肉輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年11月	22年11月	前年同月比（増減率）	シェア	22年（1～11月）	前年同期比（増減率）
米国	31.9	25.7	▲19.5%	32.2%	309.4	20.4%
中国	11.2	21.6	92.3%	27.1%	146.4	▲39.7%
日本	14.9	11.6	▲22.3%	14.5%	172.2	▲8.8%
メキシコ	14.9	11.3	▲24.1%	14.1%	131.3	5.8%
フィリピン	3.3	2.1	▲35.0%	2.7%	114.4	20.4%
韓国	3.9	3.0	▲23.6%	3.7%	49.1	27.2%
その他	11.8	4.6	▲61.3%	5.7%	78.3	▲16.8%
合計	91.8	79.8	▲13.1%	100.0%	1,001.1	▲3.8%

資料：Statistics Canada
注１：HSコード0203。
注２：製品重量ベース。

（調査情報部　伊藤　瑞基）

チ　リ

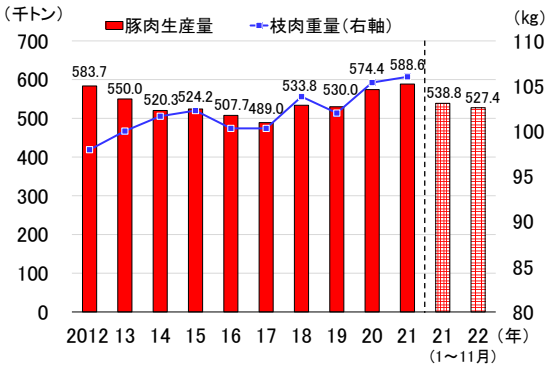
22年１～11月の豚肉輸出量、中国向けを中心に大幅な減少

22年1～11月の豚肉生産量、前年同期をわずかに下回る

チリ農業省農業政策・調査局（ODEPA）によると、2022年１～11月の豚肉生産量は、52万7399トン（前年同期比2.1%減）と前年同期をわずかに下回った（図１）。豚肉生産量は、20、21年と２年連続で増加したものの、22年は前年を下回る水準で推移している。

チリの豚肉生産量は近年、養豚企業による

図１　豚肉生産量および平均枝肉重量の推移



資料：ODEPA
注：枝肉重量ベース。

繁殖成績や飼料要求率の改善、種豚の遺伝的改良など、生産の効率化や平均枝肉重量の増加により増加傾向で推移している。１頭当たり平均枝肉重量(注1)は、17年の100.3キログラムから21年には106.0キログラムと5.7%増加し、直近（22年１～11月）では105.6キログラムとなった。

（注１）枝肉重量には頭部と皮が含まれる。

22年1～11月の豚肉輸出量、前年同期を大幅に下回る

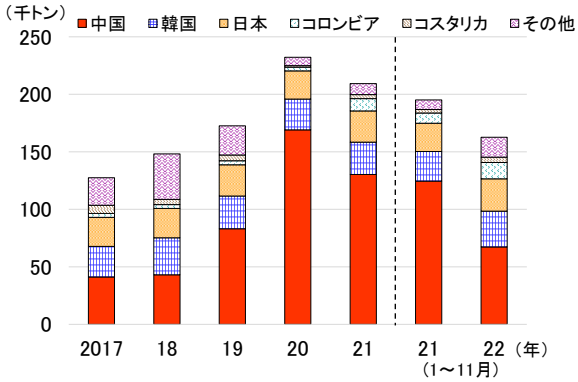
2022年1～11月の豚肉輸出量（冷蔵・冷凍）(注2)は、16万2679トン（前年同期比16.6%減）と前年同期を大幅に下回った（図２）。豚肉輸出量は20年に３年連続で過去最高を更新後、減少に転じており、月別では、21年5月～22年8月の間、16カ月連続で前年同月を下回った。

輸出先別に見ると、最大の中国向けは、同国での豚飼養頭数の回復により豚肉需給が緩和した結果、６万7294トン（同46.0%減）とほぼ半減している。21年の同国向けは、輸出量全体の62.6%を占めていたが、22年1～11月は41.4%に低下し、中国向けの減少が輸出量全体の減少につながっている。中国に次ぐ2番手の韓国向けは３万1171トン（同20.9%増）、３番手の日本向けは2万8031トン（同14.1%増）といずれも前年同期を上回った。このほか、コロンビア、コスタリカ、ペルーといった中南米向けも大幅に増加したものの、中国の落ち込み分を補うには至らなかった。

また、チリは22年12月9日、EUとの関係を強化するため、03年に発効したEU・チリ自由貿易協定（FTA）について、新たな包括協定に改定することに合意したと発表した。EUはチリに対し、豚肉については9000トンの関税割当数量を設定することとしている(注3)。

（注２）チリの豚肉輸出量は、ほとんどが冷凍品である。
（注３）海外情報「欧州委員会、EU・チリFTAを包括的な協定に改定することに合意（EU）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003430.html）を参照されたい。

図２　豚肉輸出量の推移



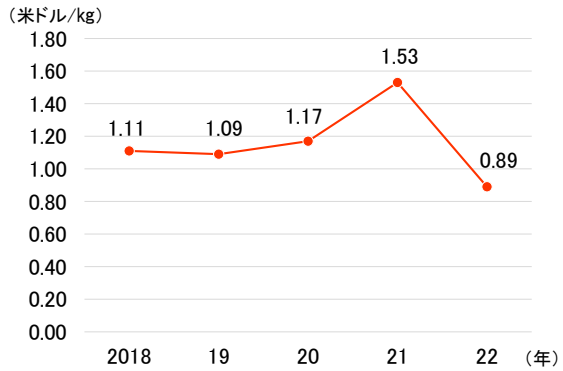
資料：ODEPA
注１：HSコード0203。
注２：製品重量ベース。

22年の肉豚生産者販売価格は前年比41.8%安

2022年の肉豚生産者販売価格は、中国向けを中心とした輸出需要の低下から1キログラム当たり0.89米ドル（117円:1米ドル=131.47円(注4)）となり、前年比41.8%安と大幅に下落した（図３）。22年は、豚肉生産者にとっては、生産者販売価格が低下するなかで、ウクライナ情勢、天候不順などによる飼料などの生産コスト高や世界的なインフレ圧力の増大により、厳しい経営環境となった。

（注４）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

図３　肉豚生産者販売価格の推移



資料：ODEPA

（調査情報部　井田　俊二）

牛乳・乳製品

米　国

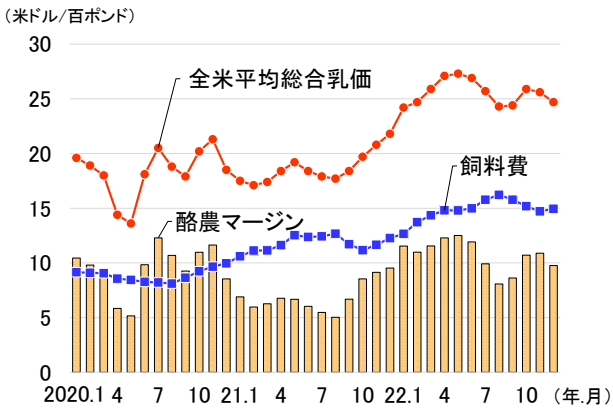
22年11月の乳製品輸出量は好調に推移

22年12月の乳価は堅調に推移

米国農務省農場サービス局（USDA/FSA）によると、2022年12月の全米平均総合乳価は、生乳100ポンド当たり24.7米ドル（1キログラム当たり71.59円：1米ドル=131.47円(注1)、前年同月比13.3%高）となり、前月比では下落したものの、高水準で推移している（図1）。現地報道によると、生乳生産量が増加していることや、乳製品の国内需要が低下していることもあって、今後数カ月の乳価は下落基調が見込まれるとしている。また、飼料費も高水準で推移しているが、乳価の上昇幅がそれを上回ったことから、同月の酪農マージン(注2)は同2.4%増の同9.76米ドル（同28.29円）とわずかに増加した。

（注1）三菱USJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均為替相場」の2023年1月末TTS相場。
（注2）酪農家のセーフティーネット制度である酪農マージン保障プログラム（DMC）で算定される全米平均総合乳価と飼料費の差額としての収益。DMCでは、酪農マージンが発動基準を下回った場合、補塡（てん）が発動される。

図１　酪農マージンの推移

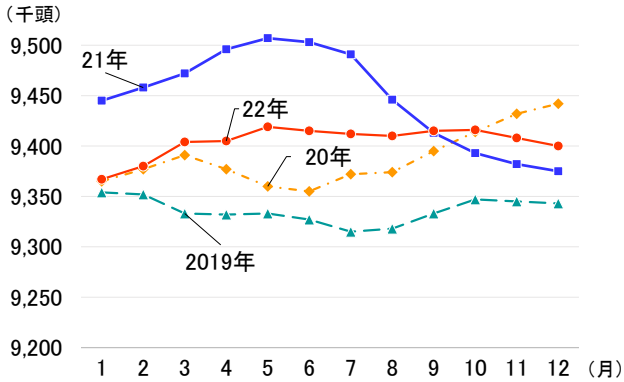


資料：USDA/FSA

生乳生産量は4カ月連続で前年を上回る

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年12月の乳用経産牛飼養頭数は940万頭（前年同月比0.3%増）と4カ月連続で前年同月を上回って推移している（図2）。

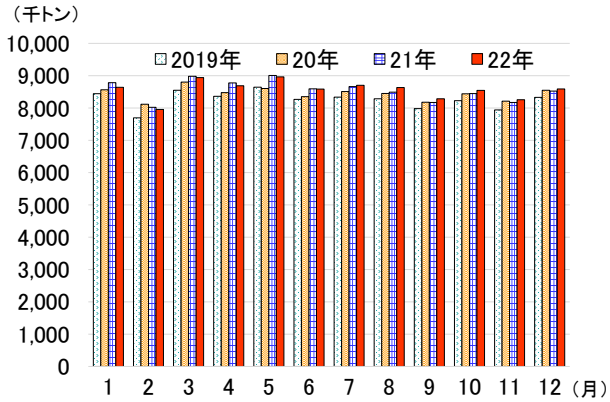
図２　乳用経産牛飼養頭数の推移



資料：USDA/NASS「Milk Production」

同年12月の生乳生産量は、飼養頭数および1頭当たり乳量の増加を背景に858万8000トン（同0.8%増）とわずかに増加し、6カ月連続で前年同月を上回った（図3）。また、米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、23年の予測として、乳価が下落するものの高水準を維持することから、飼料費の上昇が見込まれる中においても、乳用経産牛飼養頭数は22年後半の水準を維持する940万500頭とされている。

図３　生乳生産量の推移



資料：USDA「Milk Production」

乳製品輸出量は増加傾向

USDA/ERSによると、2022年11月の主要乳製品輸出量は好調に推移し、脱脂粉乳を除いていずれも前年同月を上回った（表）。

品目別に見ると、チーズ（前年同月比12.9%増）は主要輸出先であるメキシコ、日本、オーストラリアなどでの需要増加を受け、17カ月連続で前年同月を上回った。また、ホエイ（同17.4%増）およびWPC（タンパク質濃縮ホエイ、同32.1%増）については、国内需要が低迷する中、中国からの飼料用需要により大幅に増加した。ただし、11月下旬には中国国内の豚肉価格が下落しており、米国乳製品輸出協会（USDEC）によると、ホエイおよびWPCの輸出は今後鈍化する可能性もあるとしている。

表　主要乳製品輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年 11月	22年 11月	前年同月比 （増減率）	22年 （1～11月）	前年同期比 （増減率）
脱脂粉乳	72.6	70.4	▲3.0%	763.9	▲7.2%
乳糖	35.7	38.9	8.9%	414.6	14.9%
チーズ	33.2	37.5	12.9%	415.6	11.8%
ホエイ	16.9	19.9	17.4%	206.2	▲1.4%
WPC	10.9	14.4	32.1%	156.1	21.0%
バター	3.2	8.4	160.0% （約2.6倍）	62.0	52.8%

資料：USDA「Dairy Data」
注：製品重量ベース。

（調査情報部　小林　大祐）

E　U

生乳出荷量は増加、乳製品価格は下落

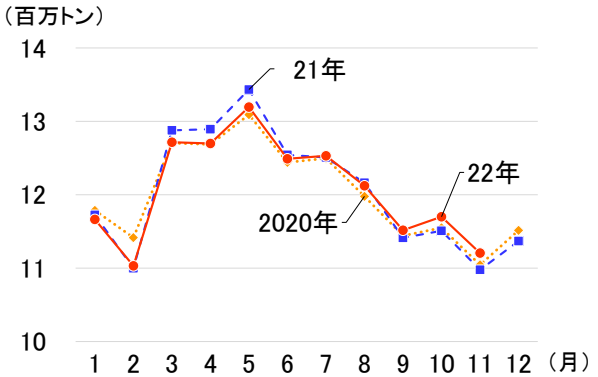
22年11月の生乳出荷量、前年同月比2.1%増

欧州委員会によると、2022年11月の生乳出荷量（EU27カ国）は、1120万6200トン（前年同月比2.1%増）となった（図１）。22年の生乳出荷量は、飼料、燃料および肥料費の高騰や熱波・干ばつの影響により、秋口までは減少が見込まれていた。しかし、その後は欧州の多くの地域で穏やかな天候が続いたことで放牧環境が良好になり、秋以降の生乳出荷量が増加した。現地情報によると、飼料費などの生産コストは依然高いものの、乳価がそれを上回って推移していることが、

生産者の出荷意欲を後押ししているとしている。

同月の出荷量を国別に見ると、EU最大の生乳生産国であるドイツは同3.9%増、第２位のフランスは同1.1%増、第３位のオランダは同5.1%増となっている（表）。この上位３カ国でEU出荷量の４分の1以上を占めている。

図１　生乳出荷量の推移



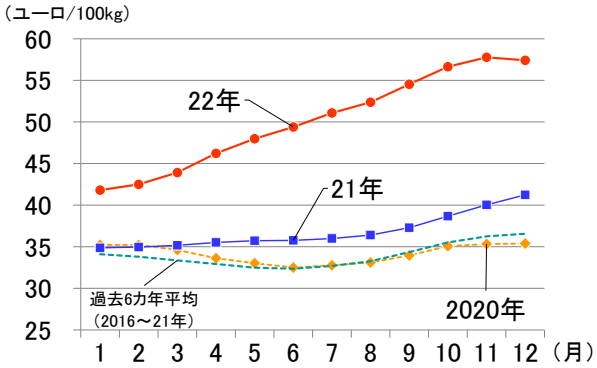
資料：欧州委員会「Eurostat」
注１：直近月は速報値。
注２：データが未公表のルクセンブルグを除く。
注３：2022年11月はマルタも除く（N/A値のため）。

生乳取引価格は高水準で推移も今後に懸念

欧州委員会によると、2022年12月の生乳取引価格（EU27カ国の平均）は、100キログラム当たり57.41ユーロ（8213円：1ユーロ=143.06円(注)、前年同月比40.2%高）と依然として前年同月を大幅に上回って推移しているものの、２年５カ月ぶりに前月を下回った（図２）。現地報道によると、後述する乳製品価格の下落により、今後も乳価の引き下げは避けられないだろうと予測している。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

図２　生乳取引価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」
注１：直近月は推定値。
注２：データが未公表のルクセンブルグを除く。

表　主要生産国別生乳出荷量の推移

（単位：千トン）

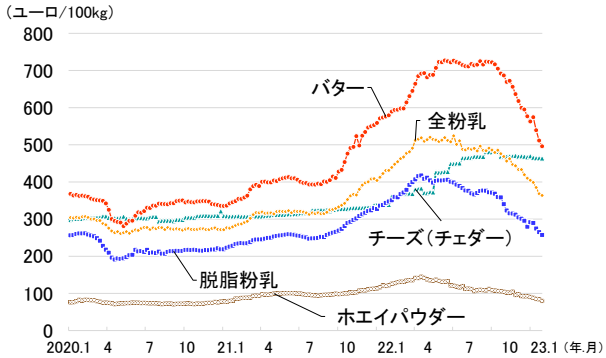
	2021年11月	22年11月	前年同月比（増減率）	22年（1～11月）	前年同期比（増減率）
ドイツ	2,447	2,543	3.9%	29,285	▲ 0.3%
フランス	1,878	1,898	1.1%	22,026	▲ 0.8%
オランダ	1,060	1,114	5.1%	12,593	0.9%
イタリア	1,024	1,012	▲ 1.2%	11,763	▲ 1.6%
ポーランド	968	992	2.5%	11,730	2.1%
スペイン	590	574	▲ 2.8%	6,708	▲ 2.1%
アイルランド	480	515	7.4%	8,812	0.7%
デンマーク	446	448	0.5%	5,190	0.2%
ベルギー	340	363	6.9%	4,117	2.4%
その他	1,745	1,748	0.2%	20,642	▲ 0.5%
合計	10,977	11,206	2.1%	132,865	▲ 0.1%

資料：欧州委員会「Eurostat」
注１：速報値。
注２：データが未公表のルクセンブルグを除く。
注３：2022年11月はマルタも除く（N/A値のため）。

乳製品価格は全体的に下落

欧州委員会によると、直近の2023年1月29日の週の乳製品価格（EU27カ国の平均）は、バターが100キログラム当たり496ユーロ（7万958円、前年同期比14.4%安）、脱脂粉乳が同257ユーロ（3万6766円、同25.9%安）、全粉乳が同364ユーロ（5万2074円、同15.6%安）、ホエイパウダーが同80ユーロ（1万1445円、同34.6%安）といずれも前年同期を大きく下回り、ほぼ一貫して下落基調にある（図3）。現地情報によると、インフレによる価格の高騰が需要を減退させたとしており、特にドイツやフランスでは、バターなど一部の乳製品の売り上げが大幅に減少している。さらに、消費者のより低価格なプライベートブランドなどへの移行も見られるという。一方、チーズ（チェダー）は同464ユーロ（6万6380円、同36.8%高）と堅調に推移しているが、直近は下落基調にある。現地情報によると、22年は過去20年間で初めてチーズ生産量が減少したことで価格は上昇していたが、同価格の急激な上昇により消費者の購買意欲が減少した可能性を指摘している。

図３　乳製品価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」

（調査情報部　上村　照子）

N　Z

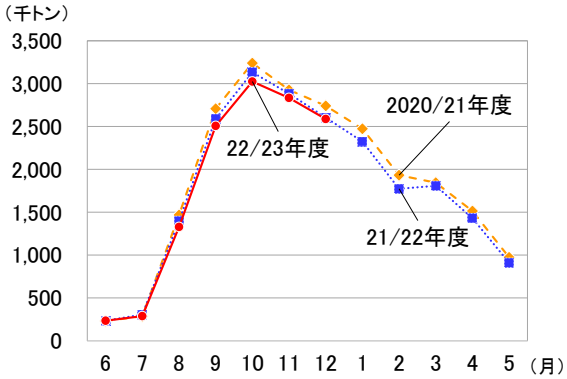
生産者支払乳価、乳製品国際価格の下落基調を反映し後退の見込み

22年12月の生乳生産量、6カ月連続で前年同月を下回る

ニュージーランド乳業協会（DCANZ）によると、2022年12月の生乳生産量は258万8200トン（前年同月比0.6%減）と6カ月連続で前年同月割れとなった（図1）。ニュージーランド証券取引所（NZX）は今後の生乳生産量について、夏季（12月～翌2月）は天候が好転し、牧草の生育改善が見込まれることから、前年同水準まで回復すると見込んでいる。

一方で、現地報道では、同月は北島を中心に激しい雨が断続的に降り、西部低地の複数の農場で浸水などの被害が相次いだとしている。また、大雨の影響で、ワイカトなどの一部地域では、飼料用トウモロコシの播種（はしゅ）作業に大幅な遅延が生じ、冬季（6～8月）の飼

図１　生乳生産量の推移



資料：DCANZ
注：年度は６月～翌５月。

料不足が懸念されるなど、生乳生産は依然として厳しい状況にあるとしている。

乳製品輸出量、全粉乳を除く主要３品目が大幅増

ニュージーランド統計局（Stats NZ）によると、2022年12月の乳製品輸出量は、全粉乳を除く主要3品目で前年同月を上回った（表、図２）。品目別に見ると、脱脂粉乳は主要輸出先であるインドネシア向けが前年同月比で2倍弱増加したことで全体でも大幅に増加した。全粉乳は最大の輸出先である中国向けが同4割程度減少したことで全体でもかなり大きく減少した。中国では、COVID-19に起因する需要の低下から、国内の乳製品需給が緩和傾向にあり、粉乳に仕向けられる生乳が増加しているとされている。一方、バターおよびバターオイル、チーズについては、主要輸出先の日本、豪州、韓国向けがそれぞれ増加したことで全体でも大幅に増加した。

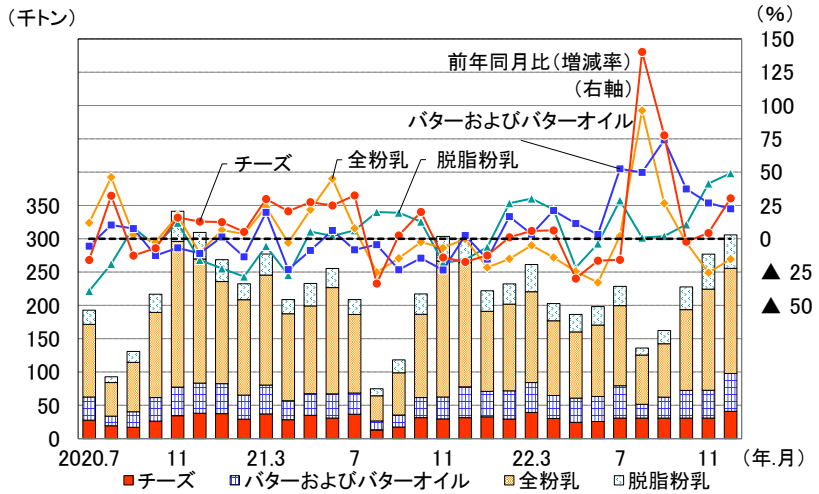
表　乳製品輸出量の推移

（単位：トン）

品目	2021年12月	22年12月	前年同月比（増減率）	22/23年度（7～12月）	前年同期比（増減率）
脱脂粉乳	33,650	50,204	49.2%	196,016	27.4%
全粉乳	186,215	157,855	▲ 15.2%	705,615	▲ 3.9%
バターおよびバターオイル	46,331	56,765	22.5%	240,290	39.0%
チーズ	31,478	41,049	30.4%	164,765	3.2%

資料：Stats NZ
注１：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、全粉乳が0402.21と0402.29、バターおよびバターオイルが0405.10と0405. 90、チーズが0406。
注２：製品重量ベース。
注３：年度は７月～翌６月。

図２　乳製品輸出量および前年同月比（増減率）の推移



資料：Stats NZ
注：製品重量ベース。

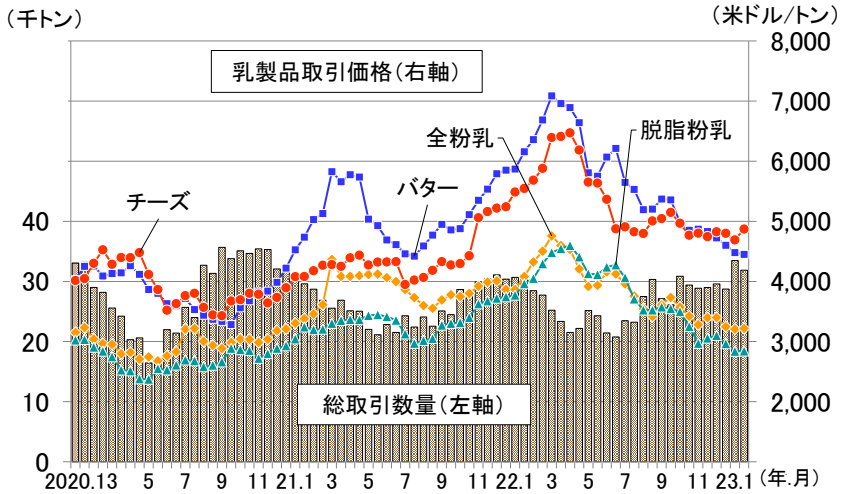
GDT価格、チーズが値上がりも大きな変動はなし

2023年1月17日に開催されたGDT(注1)の1トン当たりの平均取引価格は、チーズが前回開催（1月3日）からやや値上がりしたものの、その他3品目に大きな変動は見られなかった（図３）。GDT価格は、22年3月に過去最高値に達して以降、中国でのCOVID-19の拡大やインフレ圧力に起因する世界的な乳製品需要の減退などを受けて、下落傾向で推移している。今後の市場動向については、中国でゼロコロナ政策が緩和されたものの、粉乳を中心に国内在庫が積み上がっていることから、「中国が国際市場に戻るのはもう少し先になる」との見解が大方を占めており、乳製品市場は引き続き不透明な状況が続くとされている。

また、同価格の下落基調を受けて、NZ乳業大手のフォンテラ社は12月８日、22/23年度（６月～翌５月）の生産者支払乳価を生乳の固形分(注2)1キログラム当たり平均9.25NZドル（799円：１NZドル=86.34円(注3)）から同9.00NZドル（777円）に下方修正すると公表した。今後の状況次第では、さらなる下方修正の可能性があるほか、次年度の生産者支払乳価への影響も懸念されている。

（注１）グローバルデイリートレード。月2回開催される電子オークションで、当該価格は乳製品の国際価格の指標とされている。
（注２）乳脂肪分および乳たんぱく質。
（注３）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

図３　GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



資料：GDT

（調査情報部　工藤　理帆）

中　国

生乳生産量は増加するも乳製品需要は振るわず

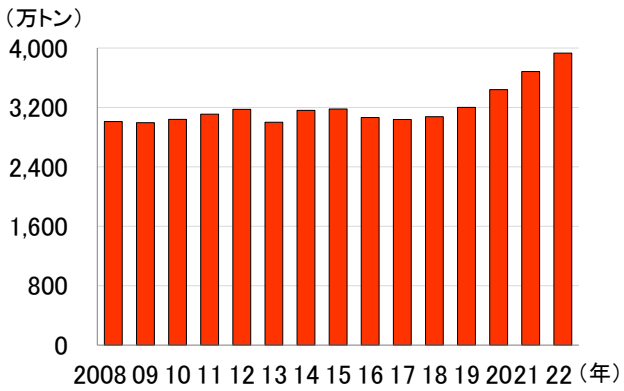
22年の生乳生産量、前年比6.8%増

中国国家統計局によると、2022年の生乳生産量は、前年比6.8%増の3932万トンとなった（図１）。

中国農業農村部は、22年4月に公表した「中国農業展望報告（2022-31）」(注1)の中で、同年の生乳等生産量(注2)を3979万トン（前年比5.4%増）と予測していた。しかし、（１）22年の生乳のみの生産量が3932万トンに達したこと（２）生乳以外の乳の過去3年平均生産量が101万トンであること―を加味すると、22年の生乳等生産量は同国史上初めて4000万トンの大台を超える可能性が高いとみられる。

（注１）海外情報「中国農業展望報告（2022-2031）を発表（乳製品編）（中国）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003277.html）を参照されたい。
（注２）牛由来の生乳のほか、ヤギやヤクなどの他品種由来の乳を含む生産量。

図１　生乳生産量の推移



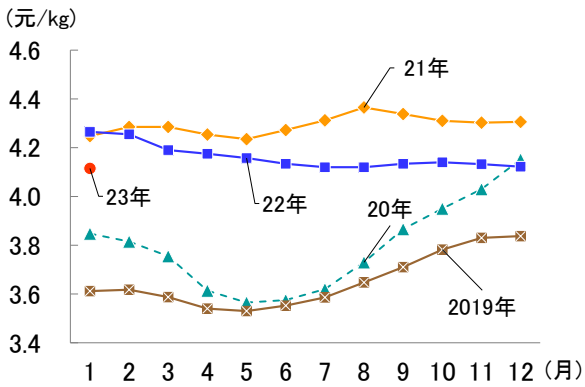
資料：中国国家統計局、中国乳業年鑑

需給の緩和で生乳価格は低下傾向

生乳価格は、2021年8月以降、緩やかな下落または横ばいで推移しており、23年1月には1キログラム当たり4.12元（81円：1元=19.60円(注3)となった（図２）。この価格水準は、3元台で推移していた20年中盤との比較では高値といえるが（20年同月比7.0%高）、前年同月比では3.5%安となっている。最近の価格動向について現地専門家からは、政府主導の酪農振興などにより生乳の生産能力は大いに向上し続けている一方で、COVID-19の拡大などから消費が落ち込み、需給が緩和していることなどが要因に挙げられた。また、一般的に酪農家に比べて乳業メーカーの価格交渉力が強いため、地方を中心に政府統計値より低い価格で生乳取引が行われており、生乳価格の下落と飼料価格高騰によるコスト上昇という二重の圧力から、苦境に立たされている酪農家も少なくないとの意見も聞かれた。

（注３）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

図２　生乳価格の推移



資料：中国農業農村部
注：主要10省・自治区（全国の生乳生産量の８割以上を占める）の農家庭先価格の平均。

22年の乳製品輸入量は大幅減

2022年の主要乳製品輸入量は、バターおよび育児用調製粉乳を除く５品目で減少した（表）。前年（21年）の輸入量が非常に大きかったことが影響しているが、現地では、「過去30年で最大の減少幅」とも報道されている。22年の乳製品輸入の特徴として、（１）国際相場の高騰や国内の生乳供給増加などによる輸入品の価格優位性や輸入意欲の低下（２）COVID-19に起因する、国産も含めた乳製品全体の需要低下による輸入需要の減退―など、輸入量減少となった背景が挙げられる。

表　主な乳製品の品目別輸入数量の推移

（単位：万トン）

	2018年	19年	20年	21年	22年	前年比（増減率）	【参考：輸入額】前年比（増減率）
全粉乳	52.1	67.1	64.4	84.9	70.1	▲17.4%	▲2.3%
脱脂粉乳	28.0	34.4	33.6	42.6	33.5	▲21.2%	2.6%
飲用乳	54.4	72.9	84.5	99.6	72.2	▲27.5%	▲19.9%
ヨーグルト	2.7	3.2	2.8	2.5	2.2	-	-
チーズ	10.8	11.5	12.9	17.6	14.5	▲17.4%	▲1.5%
バター	8.7	6.2	8.6	9.7	10.1	4.1%	39.8%
育児用調製粉乳	33.3	35.6	34.8	27.3	28.0	2.8%	7.0%
ホエイ	55.5	45.1	62.3	71.8	59.9	▲16.6%	▲2.1%

資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは、全粉乳が0402.21と0402.29、脱脂粉乳が0402.10、飲用乳が0401.10と0401.20、ヨーグルトは0403.10（2021年まで）と0403.20（22年）、チーズが0406、バターが0405.10、育児用調整粉乳が1901.10、ホエイが0404.10。なお、ヨーグルトは、22年１月１日のHS品目表の改訂により、市場実態に合わせてヨーグルトの範囲が拡大されたため、22年とそれ以前のデータに連続性はない。

（調査情報部　阿南　小有里）

飼料穀物

世　界

世界の期末在庫は前月に引き続き３億トンを下回る見込み

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2023年1月12日、22/23年度の世界のトウモロコシ需給予測値を更新した（表）。

これによると、世界のトウモロコシ生産量は11億5593万トン（前年度比4.9%減）と前月から593万トン下方修正され、前年度をやや下回ると見込まれている。地域別に見ると、中国などが上方修正されたものの、米国やアルゼンチン、ブラジルなどが前月から下方修正された。特に、12月から１月初めにかけて猛暑が続くアルゼンチンでは、主産地の早植えトウモロコシの収量が減少し、前月から300万トン下方修正されている。また、ブラジルも南部の一部で発生している干ばつによって第1期作のトウモロコシの減産が見込まれている。

輸入量は、世界全体で１億7545万トン（同4.7%減）と前月から97万トン下方修正され、前年度からやや減少すると予測されている。地域別に見ると、ベトナムやタイ、ペルーなどが前月から下方修正された。

消費量は、世界全体で11億6547万トン（同3.0%減）と前月から508万トン下方修正され、前年度からやや減少すると見込まれている。地域別に見ると、最大の消費国である中国が前月から200万トン上方修正されたものの、米国、ブラジル、ウクライナなどが前月から下方修正された。中国では、生産量が前月から上方修正されたことやソルガムの輸入量の減少予測を背景に飼料向け需要が増加しており、全体の消費量は2億9700万トン（同2.1%増）と見込まれている。

輸出量は、世界全体で１億7817万トン（同12.7%減）と前月から346万トン下方修正され、前年度からかなり大きく減少すると予測されている。地域別に見ると、ウクライナなどが前月から上方修正されたものの、減産の影響を受けた米国やアルゼンチンなどは前月から下方修正された。

この結果、期末在庫は２億9642万トン（同3.1%減）と前月から198万トン下方修正され、前月に引き続き３億トンを下回ると見込まれている。

表　主要国のトウモロコシの需給見通し（2023年1月12日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区　　分	2020/21年度	21/22年度	22/23年度			
		（推計値）	（12月予測）	（１月予測）	前年度比（増減量）	前年度比（増減率）
米国						
期首在庫	48.76	31.36	34.98	34.98	3.62	11.5%
生産量	358.45	382.89	353.84	348.75	▲ 34.14	▲ 8.9%
輸入量	0.62	0.62	1.27	1.27	0.65	2.0倍
消費量	306.69	317.12	305.45	304.56	▲ 12.56	▲ 4.0%
輸出量	69.78	62.78	52.71	48.90	▲ 13.88	▲ 22.1%
期末在庫	31.36	34.98	31.93	31.54	▲ 3.44	▲ 9.8%
アルゼンチン						
期首在庫	3.62	1.18	1.49	1.49	0.31	26.3%
生産量	52.00	49.50	55.00	52.00	2.50	5.1%
輸入量	0.01	0.01	0.01	0.01	0.00	0.0%
消費量	13.50	13.70	14.00	14.00	0.30	2.2%
輸出量	40.94	35.50	41.00	38.00	2.50	7.0%
期末在庫	1.18	1.49	1.49	1.49	0.00	0.0%
ブラジル						
期首在庫	5.33	4.15	4.95	3.95	▲ 0.20	▲ 4.8%
生産量	87.00	116.00	126.00	125.00	9.00	7.8%
輸入量	2.85	2.30	1.30	1.30	▲ 1.00	▲ 43.5%
消費量	70.00	72.00	77.00	76.00	4.00	5.6%
輸出量	21.02	46.50	47.00	47.00	0.50	1.1%
期末在庫	4.15	3.95	8.25	7.25	3.30	83.5%
ウクライナ						
期首在庫	1.48	0.83	5.09	5.09	4.26	6.1倍
生産量	30.30	42.13	27.00	27.00	▲ 15.13	▲ 35.9%
輸入量	0.02	0.02	0.00	0.00	▲ 0.02	-
消費量	7.10	10.90	7.70	6.20	▲ 4.70	▲ 43.1%
輸出量	23.86	26.98	17.50	20.50	▲ 6.48	▲ 24.0%
期末在庫	0.83	5.09	6.89	5.39	0.30	5.9%
EU						
期首在庫	7.38	7.88	9.94	9.94	2.06	26.1%
生産量	67.44	70.98	54.20	54.20	▲ 16.78	▲ 23.6%
輸入量	14.49	19.78	21.50	21.50	1.72	8.7%
消費量	77.70	82.70	76.10	76.10	▲ 6.60	▲ 8.0%
輸出量	3.74	6.00	2.20	2.20	▲ 3.80	▲ 63.3%
期末在庫	7.88	9.94	7.34	7.34	▲ 2.60	▲ 26.2%
中国						
期首在庫	200.53	205.70	209.14	209.14	3.44	1.7%
生産量	260.67	272.55	274.00	277.20	4.65	1.7%
輸入量	29.51	21.88	18.00	18.00	▲ 3.88	▲ 17.7%
消費量	285.00	291.00	295.00	297.00	6.00	2.1%
輸出量	0.00	0.00	0.02	0.02	0.02	-
期末在庫	205.70	209.14	206.12	207.32	▲ 1.82	▲ 0.9%
世界計						
期首在庫	307.41	292.54	307.09	305.95	13.41	4.6%
生産量	1,129.20	1,214.88	1,161.86	1,155.93	▲ 58.95	▲ 4.9%
輸入量	184.94	184.08	176.42	175.45	▲ 8.63	▲ 4.7%
消費量	1,144.08	1,201.46	1,170.55	1,165.47	▲ 35.99	▲ 3.0%
輸出量	182.70	204.03	181.63	178.17	▲ 25.86	▲ 12.7%
期末在庫	292.54	305.95	298.40	296.42	▲ 9.53	▲ 3.1%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
注：各国の穀物年度　世界、米国：９月～翌８月/ウクライナ、EU、中国：10月～翌９月/ アルゼンチン、ブラジル：３月～翌２月。

米国などの大豆生産量は下方修正も、世界の期末在庫は１億トン台を維持

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2023年1月12日、22/23年度の世界の大豆需給予測値を更新した(表)。

これによると、世界の生産量は3億8801万トン（前年度比8.4%増）と前月から316万トン下方修正された。このうち、最大の生産国であるブラジルは前月から100万トン

表　主要国の大豆需給見通し（2023年１月12日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区　分		2020/21年度	21/22年度（推計値）	22/23年度（12月予測）	22/23年度（１月予測）	22/23年度 前年度比（増減率）
米国						
	期首在庫	14.28	6.99	7.45	7.47	6.9%
	生産量	114.75	121.53	118.27	116.38	▲ 4.2%
	輸入量	0.54	0.43	0.41	0.41	▲ 4.7%
	消費量	58.26	59.98	61.10	61.10	1.9%
	輸出量	61.67	58.72	55.66	54.16	▲ 7.8%
	期末在庫	6.99	7.47	5.99	5.72	▲ 23.4%
ブラジル						
	期首在庫	20.42	29.40	23.81	26.81	▲ 8.8%
	生産量	139.50	129.50	152.00	153.00	18.1%
	輸入量	1.02	0.54	0.75	0.75	38.9%
	消費量	46.68	50.25	51.75	52.50	4.5%
	輸出量	81.65	79.14	89.50	91.00	15.0%
	期末在庫	29.40	26.81	31.71	33.46	24.8%
アルゼンチン						
	期首在庫	26.65	25.06	23.90	23.90	▲ 4.6%
	生産量	46.20	43.90	49.50	45.50	3.6%
	輸入量	4.82	3.84	4.80	5.00	30.2%
	消費量	40.16	38.83	39.75	38.00	▲ 2.1%
	輸出量	5.20	2.86	7.70	5.70	99.3%
	期末在庫	25.06	23.90	23.50	23.45	▲ 1.9%
中国						
	期首在庫	24.61	31.15	31.79	31.40	0.8%
	生産量	19.60	16.40	18.40	20.33	24.0%
	輸入量	99.74	91.57	98.00	96.00	4.8%
	消費量	93.00	87.50	96.00	95.00	8.6%
	輸出量	0.07	0.10	0.10	0.10	0.0%
	期末在庫	31.15	31.40	31.50	31.33	▲ 0.2%
世界計						
	期首在庫	94.73	100.03	95.59	98.22	▲ 1.8%
	生産量	368.52	358.10	391.17	388.01	8.4%
	輸入量	165.55	157.13	166.21	164.32	4.6%
	消費量	315.44	314.19	329.32	327.32	4.2%
	輸出量	164.99	153.89	169.38	167.53	8.9%
	期末在庫	100.03	98.22	102.71	103.52	5.4%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
注１：各国の穀物年度　米国：9月～翌8月／ブラジル、アルゼンチン、中国：10月～翌9月。
注２：消費量は搾油仕向量である。

上方修正されたが、これに続く米国、アルゼンチンが干ばつの影響などからそれぞれ189万トン、400万トン下方修正されたことが影響した。

輸入量は、世界全体で1億6432万トン（同4.6%増）と前月から189万トン下方修正された。このうち、最大の輸入国である中国は、国内生産の増加（前月から193万トン上方修正）により前月から200万トン下方修正された。

消費量（搾油仕向け）は、世界全体で3億2732万トン（同4.2%増）と前月から200万トン下方修正された。このうち、最大の消費国である中国は、国内での需要減少が見込まれることで前月から100万トン下方修正された。

輸出量は、世界全体で1億6753万トン（同8.9%増）と前月から185万トン下方修正された。このうち、最大の輸出国であるブラジルは前月から150万トン上方修正されたが、これに続く米国、アルゼンチンがそれぞれ150万トン、200万トン下方修正されたことが影響した。

この結果、期末在庫は1億352万トン（同5.4%増）と前月から81万トン上方修正され、引き続き1億トン台を維持している。

例年、1月の予測は米国などの生産量が確定しつつある中で、ある程度の修正が行われるとされており、米国の穀物関係者からは、今回の予測もこの例外ではなかったとの声が出ている。特に、米国の生産量の下方修正により、同国の需給が引き続きひっ迫傾向となったことで、今後の輸出への影響などに注目が集まっている。

（調査情報部　横田　徹）

米　国

米国の輸出量は前年度比22.1%減と大幅に減少する見込み

USDA/WAOBは2023年1月12日、22/23年度（9月～翌8月）の米国のトウモロコシ需給見通しを更新した（表）。

生産量は、単収が増加するものの収穫面積の減少予測を受けて、137億3000万ブッシェル（3億4876万トン(注1)、前年度比8.9%減）と前月から2億ブッシェル（508万トン）下方修正され、前年度からかなりの程度減少すると見込まれている。

消費量は、119億9000万ブッシェル（3億456万トン、同4.0%減）と前月から3500万ブッシェル（89万トン）下方修正され、前年度からやや減少すると見込まれている。用途別に見ると、でん粉やグルコース、デキストロースなどその他工業向けでの利用の減少が見込まれている。

輸出量は、12月までの販売や出荷が低調な状況を受けて、19億2500万ブッシェル（4890万トン、同22.1%減）と前月から1億5000万ブッシェル（381万トン）下方修正され、前年度から大幅に減少すると見込まれている。

この結果、期末在庫は、12億4200万ブッシェル（3154万トン、同9.8%減）と前月から1500万ブッシェル（38万トン）下方修正され、前年度をかなりの程度下回ると見込まれている。

また、期末在庫率（総消費量に対する期末

在庫量）は、8.9%（同0.3ポイント減）と依然として前年度を下回ると予測されている。

生産者平均販売価格は、1ブッシェル当たり6.70米ドル（881円。1キログラム当たり34.7円:1米ドル=131.47円(注2)）と前月から据え置かれ、前年度からかなり大きく上昇し、引き続き高値が予測されている。

（注1）1ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。
（注2）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

表　米国のトウモロコシの需給見通し（2023年1月12日米国農務省公表）

区　分	ー単位ー	2020/21年度	21/22年度（推計値）	22/23年度			
				（12月予測）	（1月予測）	参考（換算値）	前年度比（増減率）
作付面積	（百万エーカー）	90.7	93.3	88.6	88.6	35.9（百万ヘクタール）	▲5.0%
収穫面積	（百万エーカー）	82.3	85.3	80.8	79.2	32.1（百万ヘクタール）	▲7.2%
単収	（ブッシェル/エーカー）	171.4	176.7	172.3	173.3	10.9（トン/ヘクタール）	▲1.9%
期首在庫	（百万ブッシェル）	1,919	1,235	1,377	1,377	34.97（百万トン）	11.5%
生産量	（百万ブッシェル）	14,111	15,074	13,930	13,730	348.76（百万トン）	▲8.9%
輸入量	（百万ブッシェル）	24	24	50	50	1.27（百万トン）	2.1倍
総供給量	（百万ブッシェル）	16,055	16,333	15,357	15,157	385.00（百万トン）	▲7.2%
国内消費量	（百万ブッシェル）	12,074	12,484	12,025	11,990	304.56（百万トン）	▲4.0%
飼料など向け	（百万ブッシェル）	5,607	5,718	5,300	5,275	133.99（百万トン）	▲7.7%
食品・種子・その他工業向け	（百万ブッシェル）	6,467	6,766	6,725	6,715	170.57（百万トン）	▲0.8%
うちエタノール向け	（百万ブッシェル）	5,028	5,326	5,275	5,275	133.99（百万トン）	▲1.0%
輸出量	（百万ブッシェル）	2,747	2,471	2,075	1,925	48.90（百万トン）	▲22.1%
総消費量	（百万ブッシェル）	14,821	14,956	14,100	13,915	353.45（百万トン）	▲7.0%
期末在庫	（百万ブッシェル）	1,235	1,377	1,257	1,242	31.54（百万トン）	▲9.8%
期末在庫率	（%）	8.3	9.2	8.9	8.9		0.3ポイント減
生産者平均販売価格	（米ドル/ブッシェル）	4.53	6.00	6.70	6.70	34.7（円/kg）	11.7%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
注1：年度は各年9月～翌8月。
注2：1エーカーは約0.4047ヘクタール。

（調査情報部　針ヶ谷　敦子）

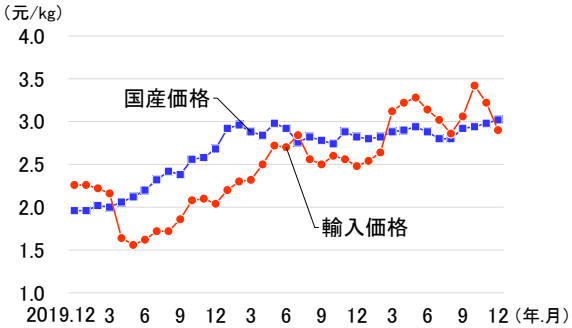
中　国

トウモロコシおよび大豆の価格動向

国産トウモロコシ価格、供給増から弱含みで推移と予想

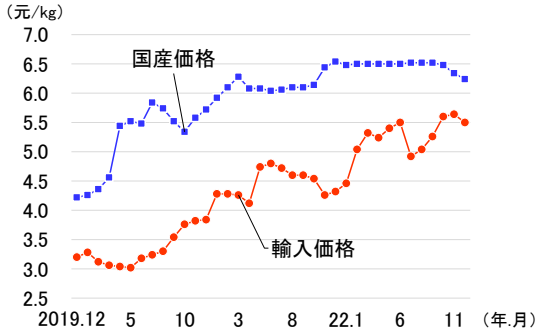
中国農業農村部は1月20日、「農産物需給動向分析月報（2022年12月）」を公表した。この中で、2022年12月の国産トウモロコシ価格は前月からわずかに上昇した（図1）。同月の国内のトウモロコシ需給を見ると、供給面では、政府によるゼロコロナ政策からの転換が図られたことで物流が全面的に回復し、市場供給量の大幅な増加が報告されている。需要面では、同じく政策の転換による今後の消費増への期待から、トウモロコシ加工業者を中心に在庫の確保が進むとされている。今後、備蓄されていた前年産のトウモロコシの市場放出も予想される中で、需給がやや緩和に向かい、価格は弱含みで推移すると見込まれている。

図１　トウモロコシ価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成
注１：国産価格は、中国東北部から広東省黄埔港までの運賃込み２級黄トウモロコシ価格。
注２：輸入価格は、米国メキシコ湾積出し２級黄トウモロコシの広東省黄埔港引渡し価格（関税割当数量内：課税後）

図２　大豆価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成
注１：国産価格は、山東省入荷価格。
注２：輸入価格は、山東省青島港引渡し価格（課税後）。

各地の価格動向を見ると、主要養豚生産地である中国南部向け飼料原料集積地となる広東省黄埔港到着の輸入トウモロコシ価格（関税割当数量内:1%の関税+25%の追加関税）は、22年12月が1キログラム当たり2.90元（57円:1元=19.60円(注)）となった。22年3月以来、国産価格を上回って推移していた輸入トウモロコシ価格は2カ月連続で下落し、国産価格を下回ることとなった。また、同月の国産トウモロコシ価格（東北部産の同港到着価格）同3.02元（59円）に比べて同0.12元（2円）安となり、国産と輸入との価格は逆転している。

国産大豆価格、需給の緩みから下落も今後は安定と予想

2022年12月の国産大豆価格は、前月に続きわずかに下落した（図2）。同月の国内の大豆需給を見ると、供給面では、今期の大豆生産量の大幅な増加により市場には十分な供給が行われていると報告されている。一方、需要面では、前月に続き川下の需要は緩慢な状況にあるとされている。このため、需給はやや緩和傾向にあるが、外出制限の撤廃などによる消費の回復に合わせて、価格は安定すると見込まれている。

各地の価格動向を見ると、主産地である黒竜江省の食用向け国産大豆平均取引価格は、12月が1キログラム当たり5.66元（111円、前年同月比7.6%高）と高い水準で推移している。また、大豆の国内指標価格の一つとなる山東省の国産大豆価格は、同6.24元（122円、同4.7%高）と同じく高い水準にある。国産大豆と輸入大豆との価格差は、国産大豆価格が下落する中で、大豆国際相場の落ち着きもあり、1キログラム当たり0.74元（15円）とわずかに広がった。

このような中で大豆の輸入量は、前年に比べて減少しつつも引き続き高い水準で推移している。22年（1～11月）の輸入量は8054万トン（前年同期比8.1%減）、輸入額は世界的な穀物相場高の影響から同12.5%増の542億8400万米ドル（7兆1367億円：1米ドル=131.47円(注)）と報告されている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2023年1月末TTS相場。

22/23年度のトウモロコシ、大豆の生産量を上方修正

中国農業農村部は2023年1月12日、最新の「中国の農産物需給状況分析」を公表した。

このうち、22/23年度（10月～翌9月）のトウモロコシの需給見通しについて、作付面積および収穫面積、生産量のいずれも前月から上方修正された（表１：網掛け）。今回（1月）の予測では、作付面積および収穫面積が前月から12万ヘクタール上方修正の4307万ヘクタール（前年度比0.6%減）、生産量が同189万トン上方修正の2億7720万トン（同1.7%増）となった。この結果、輸入量および消費量に変更がなかったことで、同年度のトウモロコシの過不足は468万トンの余剰（同30.6%減）が見込まれている。

また、同年度の大豆の需給見通しについて、トウモロコシと同様に作付面積および収穫面積、生産量のいずれも前月から上方修正された（表２：網掛け）。今回の予測では、作付面積および収穫面積が前月から31万ヘクタール上方修正の1024万ヘクタール（同21.9%増）、生産量が同81万トン上方修正の2029万トン（同23.7%増）となった。この結果、輸入量および消費量に変更がなかったことで、同年度の大豆の過不足は247万トンの余剰（前年度は7万トンの不足）が見込まれている。

22年10月時の予測では、トウモロコシの作付面積や生産量が上方修正された中で大豆はいずれも据え置かれていた。22/23年度は中央政府から大豆の増産に全力を挙げるとの方針が打ち出されたこともあり、主産地での収穫が終了し生産量がほぼ確定する今回の予測が注目されていた。

表１　中国のトウモロコシ需給見通し（2023年１月12日中国農業農村部公表）

区　分	－単位－	2020/21年度	21/22年度（推計値）	22/23年度		
				（12月予測）	（１月予測）	前年度比（増減率）
作付面積	（千ヘクタール）	41,264	43,324	42,950	43,070	▲ 0.6%
収穫面積	（千ヘクタール）	41,264	43,324	42,950	43,070	▲ 0.6%
単収	（キログラム/ヘクタール）	6,317	6,291	6,410	6,436	2.3%
生産量	（万トン）	26,066	27,255	27,531	27,720	1.7%
輸入量	（万トン）	2,956	2,189	1,800	1,800	▲ 17.8%
総供給量（生産量＋輸入量）	（万トン）	29,022	29,444	29,331	29,520	0.3%
消費量	（万トン）	28,216	28,770	29,051	29,051	1.0%
食用向け	（万トン）	955	965	980	980	1.6%
飼料向け	（万トン）	18,000	18,600	18,800	18,800	1.1%
工業向け	（万トン）	8,000	8,000	8,100	8,100	1.3%
種子向け	（万トン）	187	195	191	191	▲ 2.1%
その他向け	（万トン）	1,074	1,010	980	980	▲ 3.0%
輸出量	（万トン）	0	0	1	1	－
総消費量（消費量＋輸出量）	（万トン）	28,216	28,770	29,052	29,052	1.0%
差引数量（総供給量－総消費量）	（万トン）	806	674	279	468	▲ 30.6%

資料：中国農業農村部
注：年度は10月～翌９月。

表２　中国の大豆需給見通し（2023年１月12日中国農業農村部公表）

区　分	ー単位ー	2020/21年度	21/22年度（推計値）	22/23年度		
				（12月予測）	（１月予測）	前年度比（増減率）
作付面積	（千ヘクタール）	9,882	8,400	9,933	10,243	21.9%
収穫面積	（千ヘクタール）	9,882	8,400	9,933	10,243	21.9%
単収	（キログラム/ヘクタール）	1,983	1,952	1,961	1,980	1.4%
生産量	（万トン）	1,960	1,640	1,948	2,029	23.7%
輸入量	（万トン）	9,978	9,160	9,520	9,520	3.9%
総供給量（生産量＋輸入量）	（万トン）	11,938	10,800	11,468	11,549	6.9%
消費量	（万トン）	11,326	10,797	11,287	11,287	4.5%
搾油向け	（万トン）	9,500	9,054	9,477	9,477	4.7%
食用向け	（万トン）	1,420	1,355	1,432	1,432	5.7%
種子向け	（万トン）	76	88	78	78	▲ 11.4%
その他向け	（万トン）	330	300	300	300	0.0%
輸出量	（万トン）	6	10	15	15	50.0%
総消費量（消費量＋輸出量）	（万トン）	11,332	10,807	11,302	11,302	4.6%
差引数量（総供給量－総消費量）	（万トン）	606	▲ 7	166	247	—

資料：中国農業農村部
　注：年度は10月～翌９月。

（調査情報部　横田　徹）